

訓註『誠拙禪師語録』その三

鈴木省訓

一五一 物先禪師

筋斗を打翻す。争でか真を邈得せん。盤山老たり。光境を忘ず。月色孤円、転た新たなり。果して、天地に先だつて、心の祖となる。看来れば同火の人。

○物先禪師―物先海旭（一七三六～一八一七）月船に二十年随侍し、長松寺の月江純を嗣ぐ。後、東輝庵に住す。○筋斗―もんどりうつ。宙返り。○邈得―形取る。模写する。○盤老―「盤山孤円」馬祖の法嗣、盤山宝積の示衆。『伝燈録』等に出づ。

一五二 實際和尚

實際理地、親を弁じ疎を弁ず。拈鎚豎拂、是れ渠ぞ、渠れに非ず。咄。八十有三、跡を蔵さず。興来、木履、山爐を渉る。

○實際和尚―實際法如（一七三一～一八二二）月船を嗣ぐ。円覚寺内、続灯庵に住し、円覚に進住し、武溪に住し、続灯に帰る。○實際理地―真実究竟の境地。○拈鎚豎拂―鎚を取り上げ、払子を立てる。宗師家が学人を接待する手段。○―咄文詞では尽くしがたいところ。

一五三 楠正成

力を王室に勦わせ、賊を九夷に逐う。乃ち文、乃ち武。天下、皆な知る。一朝戦死す。万世の宏規、更に忠烈有り。佛祖も窺い難し。

○楠正成―（？～一三三六）河内の土豪。元弘の変に後醍醐天皇について挙兵す。尊氏により湊皮の戦いで敗死した。天皇方では最も優れた武将であったとされる。○九夷―古代の多くの諸民族の総称。○宏規―立派な政策。

一五四 大隋覆龜の図

皮、骨を裏み、骨、皮を裏む。大隋不会。草鞋、龜を覆う。

○大隋覆龜―大隋法真の龜をかりての公案。○大隋法真―（八三四～九一九）南岳下。出家し南遊して葉山をはじめ諸老に歴参し、長慶大安の法を嗣ぐ。

礼祖塔（祖塔を礼す）

一五五 大覚禪師

西来万里、竟に何をか伝う。塔は、嵩山栢樹の辺に在り。日本、人の深雪に立つ無し。便ち看る。分髓、今日に至って全うすることを。

○大覚禪師―蘭溪道隆（一二三～一二七八）無明慧性を嗣ぐ。建長寺開山。

○深雪―二祖慧可の法を求める姿の故事。○分髓―達磨門下、皮肉骨髓の得法
の故事。

一五六 千光祖師

兩度、三回、大東に入る。破鞋枯杖、千光を放つ。扶桑国裡、人の肯う
無し。贏れ得たり。頭顱、恁麼に長きことを。

○千光祖師―明庵栄西（一一四一―一二一五）初め天台密教を学び、入宋して
禪を修す。建仁寺の開山となる。○扶桑国裡―扶桑とは、東海の彼方にあると
いわれた樹木の名。転じて日本を指す。

一五七 仏光国師

金龍宿する処、弥清し。白鹿鳴く、辺月転た明かなり。曾って家貧しき
がために孝子無し。今に至って、敢えて爺の名を諱まず。

○仏光国師―無学祖元（一二二六―一二八六）無準師範を嗣ぐ。円覺寺開山。○
白鹿―円覺寺に白鹿洞があり、国師が説法したときに白鹿が集ってきたという。

一五八 退耕禪師

拳足、下足、是れ密印。黄龍の一派、好し、流通するに。我れ今来って
荷山の塔を礼す。別に三関の祖宗を滅する有り。

○退耕禪師―退耕行勇（一一六三―一二四一）臨済宗黄龍派。栄西を嗣ぐ。寿
福寺二世。後、建仁寺に住す。晩年、鎌倉に帰り、淨妙、東勝を建て、東勝寺
にて示寂。○三関―「黄龍三関」黄龍慧南が会下の修行僧を接化するのに用い
た三種の手段。

一五九 仏通兩開山

昨夜、虚空、筋斗を翻す。竹篋背触、竟に誦訛。師資、跡を巖谷に晦す
と雖も、免れず。後人、薛蘿を攀じることとを。

○仏通兩開山―愚中周及（一一三三―一四〇九）を仏通の開山。○竹篋背触―
「首山竹篋」「無門関」四三則に出づ。○誦訛―肝心かなめのところ。○薛蘿
―隠者の服、住い。

一六〇

課誦焼香、国師を礼すれば、青山面々、白雲披く。曹源の一滴、天下に
雨らす。是れ法雷地に震う時なること莫しや。

○七朝国師―夢窓疎石（一二七五―一三五二）臨済宗仏光派。高峰顕日を嗣
ぐ。夢窓の系統は中世禅林の主流を占め、五山文学の最盛期をつくりだした。
○曹源一滴―曹溪六祖の法源より流出した正法の意。

一六一 観翁師叔

周楞、幼自り阿爺を喪し、七歳、師に随って始めて出家す。恩、大いに
して酬い難し。酬えば、即ち負く。謾に、掃帚を抛って、怒って牙を咬
む。

○観翁―誠拙の出家の師か。○師叔―師匠の法弟に当る人。○阿爺―父親。

一六二 月船禪師 五首

空山、一片の石浮図。門、薛蘿を鎖して、落日孤なり。三拝、起き来れ
ば杜鵑叫ぶ。真容、已に你に摸糊せらる。

南方の知識、禪を学ばず。又、正法の驢辺に滅する無し。分明に、更に
弥天の罪有り。窮餓相煎すること八十年。

一暑一寒一衲衣。氍毹たる白髪、翠微に倚る。壁間挂在す罵天の口。便
ち、叢林に与えて是非を鼓せしむ。

武溪、深き処、自から朦朧。凝りて瘴煙と作り、散して風と作る。鉄作

の心肝も正に断絶。毒淫は、砒礪と同じからず。

月明一夜、出づること何ぞ遅き。雲霧、峰前、黯として披けず。將に謂えり。当年、曾って徳に負くと。到頭、今日、果して斯の如し。

○月船禪師—月船禪慧（一七〇二—一七八一）北禪道済に投じて出家。誠拙の得法の師。○浮図—仏塔・卒塔婆を指す。○真容—開山及び歴代祖師の尊像。

○南方知識—徳山の故事。○正法驢辺—臨済の故事。○弥天罪—罪が天に一杯満ちている。罪過弥天。○窮餓相煎—理が窮まり、語が尽きることの譬え。

○毳毼—細長く垂れ下がっているさま。○翠微—山の緑いろのもや。○武漢—月船の著書に武漢集がある。月船の住した東輝庵を指す。○朦朧—朧氣に見える様。○瘴煙—毒を含んでいるもや。

一六三 桂洲和尚

靈蹤、本と自から来由有り。含輝亭、空しくして暮色愁う。因って憶う。両堂賓主の話、君が与に一喝し、謾に相酬う。

○桂洲和尚—桂洲道倫（一二七四—一七九四）天竜寺二二世。○含輝亭—桂洲道倫の号。○両堂賓主—「賓主歴然」『臨済録』に出づ。

一六四 一山和尚

隻履は西に帰り、隻履は東す。蹤由、何ぞ両般の中に在らん。千峰、春暮れて新緑を添う。敢えて青青を認めて老翁を問わん。

○一山和尚—一山心恒（一二七四〇—一八一五）大休慧昉を嗣ぐ。天竜・建仁等で衆を接化する。○隻履—達磨が隻履を持って中国から印度へ帰ったと言う故事。○蹤由—あとかた。古今の業績。

一六五 南院国師

無学祖翁、此の子無し。龜山皇帝、其の人を得たり。春回って御苑、花

千樹。鼻孔、依然として上唇に掛く。

○南院国師—南院祖円（一二六一—一三二三）無学祖元の法嗣。龜山上皇の勅を受け南禪寺に出世した。

仏事

一六六 仏成道

壁間に掛在す。墨面の瞿曇。地上に立定す。肉身の釈迦。転轆轤、活鱗、眉間の光明、山河を照す。嘆。梅は南枝従り綻び、雪は北地に到つて多し。

○仏成道—十二月八日釈尊成道の日。○瞿曇—釈迦を指す。○転轆轤—宛転自在にしてどここうらないこと。○活鱗—活刺として活氣に満ち溢れたはたらき。

一六七 浮島禪師の一周忌 三禅客の請

芙蓉の三万丈を抜取して、去年、今日、清虚に歩す。再来、蟪蛄眼に抛向す。人は虎溪三笑の図と作す。

○浮島禪師—遂翁元慮（一二七二—一七八九）白隱慧鶴を嗣ぐ。○蟪蛄—極めて微妙なもの。○虎溪三笑—道教の陸修静と陶淵明、僧の慧遠が虎溪で大笑した故事。

一六八 龍泉開山の南峰和尚忌

蟪蛄、天に連なり、春、戸に逼る。梅花、咲を供し、柳、眉を舒ぶ。南峰南嶽、没蹤跡。是れ東山、夢を原する時なること莫しや。

○龍泉—不明。○南峰—不明。○没蹤跡—あとかたがない。

一六九 来福の開山、不蔵和尚の三百五十年

大道、從來、覆蔵せず。春風満面、胡牀に倚る。曾て手を白崖に撒し去

るに縁って、尺二の眉毛、恰も霜に似たり。

一七〇 仏光忌

龍淵、你に竹篋子を与う。還って鷲峰に到って、機、未だ親しからず。奉に太元三尺の剣を免がれて、日本一州の人を熱瞞す。

○仏光忌―弘安九年九月三日示寂。現在は、十月三日円覺寺において開山忌が行われている。○太元云々―無学祖元が、中国において役人に首を切られそうになった時に読んだ詩の故事。○熱瞞―甚だしく他より欺かれること。

一七一 仏涅槃

時、將に過ぎんとす。我、將に滅せんとす。二月の春風、別恨頻りなり。若し、波旬一咲を供せずば、双林樹下、払って人無し。

○波旬―欲界最上の他化自在天宮に住する自在天王のこと。○双林―沙羅双樹のこと。

一七二 虚空蔵菩薩及十六応真の開光

咄。這の木樞子、決定して応真に非ず。関楨、纔かに撥転すれば、各々自ら面、春の如し。徐徐として相揖して云わく、謹んで諸上人に白す。世尊、我等に勅して、末世の法輪を護し、護して今日に至り、暫くも休息の辰無し。須く知るべし。風声雨滴、柳緑花紅、雀噪鴉鳴、樵歌漁唱、尽く所因有り。山僧、此の語を聴取して端無く、面上嗔りを発し、暮に烏藤杖を拈起して、打って一微塵と為せんと欲す。傍ら虚空蔵菩薩有り。云わく、止みねい止みねい。他の高賓を悩ますこと莫れ。這裡に至って長者手を拍し、短者拍す。一拍兩拍。笑うこと転た新たななり。何んが、故に、是の如くなる。大家、理に覚して親に覚せず。

○虚空蔵菩薩―智海慈悲の功德が广大無窮で、恰も虚空を蔵としたような菩薩。○十六応真―十六大阿羅漢のこと。仏法を守護する阿羅漢。○開光―開眼のこと。○咄―呼びかけの語。○木樞子―香木の断片のこと。○関楨―齒車やしかけで自在に動くからくり。○柳緑花紅―『東坡集』に出づ。見たままそのままが真理の具体相。○烏藤杖―拄杖のこと。

一七三 十六羅漢の点眼

台嶺の烟霞、画裡に開く。応真二八笑哈哈。然も四天下を一日とすも門前の下馬台に顛蹶す。

○台嶺―天台のこと。もと道教の修行道場であったが、後、天台宗の根本道場となる。○烟霞―山水の景色。○画裡―絵の中。○哈哈―笑うこと。○顛蹶―つまずき倒れる。

一七四 護法社の点眼

仏海寺主の湛巖師の時、円入禪者なるもの有り。数々、庭松に攀じて天に昇らんと欲す。師、其の足を鞭つ者、曰く、我に昇天を許せ。常住を守護せんと云って遂に昇る。今茲、丁巳の夏、宝山権現と改め、護法社と扁す。

是れ凡、是れ聖、不二円入。口有り、天に向かう。未だ曾て呼吸せず。仏天汝に一階を賜う。常住を護惜するを急と為せよ。左右を顧視して云わく、大家、還って此の人を知るや。相對して無言独足にして立つ。

○仏海寺―愛媛県宇和島市、妙心寺派に属す。山名は法宝山。○丁巳―宝政九年（一七九七）○顧視―ふりむいて見回すこと。

一七五 八坂宝塔の慶讃

京城の東山法観寺の宝塔は、往昔の上宮太子の鼎建する所なり。爾来、一千有余載、其の際、屢々回祿に罹り、殿堂、廊廡、尽く灰塵となる。唯、宝塔のみ有って、巖然たるのみ。豈に太子の願力の致す所に非ずや。然も、亦、頓弊傾斜に就く。爰に、建仁の靈洞の統芳西堂和尚、修營に年を累ね、其の功、將に成らんとす。俄然として化す。嗣子の景和座原、先師の志を継ぎ、益々嚴飾を加え、輪煥、古に復す。緇素随喜せざることなし。適々、余、相国禪寺に寓す。景和座原、来たつて余が四來の雲納を率いて塔下に就いて慶讃せんことを請う。且、道う。七朝国師、慶讃の例を攀つと。乃ち、固辞すること能わず。只、過當を愧づ。謹んで拙偈一章を打して、其の需に應ず。実に文化七年庚午、春正月十一日、偈に曰く、五級の浮図、勢已に傾く、淨藏独許す、嘉声を振るい、分明に人間の力を借らず。試みに聴け。雲間宝鐸の鳴るを。

○法観寺―臨濟宗建仁寺派に属す。別名八坂寺という。聖德太子が念持仏觀音の示現によって建立した。仁治元年（一二四〇）に禪宗となる。○相国―臨濟宗相国寺派本山。誠拙は、晩年相国、天龍に住す。○文化七年―一八一〇年

一七六 豆州海蔵寺、方丈の落慶、弥勒仏の遷座前に聞思大士を安置す。

朋、遠方自り昨日来る。春鴻、又、雁門に向かつて回る。観音殿裡に弥勒を見る。七尺の烏藤、笑滿腮。共に惟みれば、当来下生、弥勒大菩薩、事障を除き、輪廻を断ず。神通力を以ての故に。悲願海に乘じ来たつて、歩を百十城に進むに難為なら令めず。百十城、速やかに成る。何んぞ必ずしも敢えて八万の門に弾指することを勞せん。八万の門、頓に

開く。這裡の妙峰頂突出す。兜率台、是に因つて之を觀ずれば瑞雲名山、即ち是れ龍華三會の春。列祖、齊しく希有と叫ぶ。海蔵肅寺、即ち是れ龍宮の大経卷。諸仏、皆、善哉と嘆ず。挙手動足、随处清淨、灰頭土面、何んぞ塵埃を惹かん。語声未だ断えず。一人有り。座前に鞠躬して曰く、我は是れ童子、善財、殊に來たつて和尚の説話を聴取するに、猶、義と相乖くに似たり。此の寺は、是れ座主の道場、宗は即ち天台なり。光嚴力生、革故鼎新して、以て禪窟と爲し、英仲西堂和尚を譜して開山始祖と爲す。何んぞ一語を以て二老漢のために慶讃の良媒を成さざる。山僧、右手を伸べて云わく、文殊、遙かに你が頂を摩する底の道理を知るや。童子、俄爾として見えす。空中、惟、雷鳴を聞く。左右を顧視して云わく、大衆、還つて聞取すや。其れ未だ然らずんば、万却干生、疑猜し去るに一任す。良久して云わく、斤斧の声収まつて歓喜不徹、燕雀競い賀し、吉祥、消災。

○海蔵寺―円覺寺派に属す。○龍華三會―弥勒菩薩の教化の世ということ。○鞠躬―挨拶の形。

一七七 前住高乾、月船和尚の十三年

此の香、爐に熱向し、敢えて前住当山月船老和尚に供養せず。未だ老和尚の面目を見ざる者をして聞かしめんことを要す。道うことを見ずや。船子、夾山に問うて云わく、垂絲千尺、意、深潭に在り。鉤を離れて三寸。子、何んぞ道わざる。山、口を開かんと擬す。師、橈子を拈じて水中に打落す。山、纔かに船に上る。師、急に責む。山、口を開かんと擬す。師、又打つ。山、豁然と大悟す。乃ち、三たび點頭す。大衆を召し

て云わく、父子相見の処、万里の崖州何んが故ぞ、華亭江上、秋よりも冷やかなり。千尺の絲綸、擲って、且つ収む。応に是れ金鱗、波に躍り去るべし。何人か、頻りに釣魚の舟を喚ぶ。

○月船―月船禅慧、誠拙の師。○船子―葉山の法嗣、船子德誠。○夾山―夾山善会。船子の法嗣。

一七八 三浦の溺死の者の為に施食会を設く

一切有為の法は、夢幻泡影の如し。露の如く亦電の如し。世尊、恁麼にあなたが家裡の事を説破することを知って、あなたが家裡の人に説似すと雖も、吾が日本三浦の海浜、業風、頓に起り船を覆し、溺死し、痛苦、人に逼ることを知らず。何を以ての故に香を拈じて云わく、応作如是觀。喝。

○三浦―神奈川県三浦海岸。○一切云々『金剛經』に出づ。○応作云々―『金剛經』に出づ。

一七九 前住長松、物先禪師の収骨

遺偈に云わく、從來の暖氣、今、將に去らんとす。闍王をして、下知を伝え令むること莫れ。

夜来、太虚空を消却す。又、冷灰を撥して曉風に付す。只、闍王の下知の晚きが為に、果然として舍利、玲瓏を見る。

○物先―物先海旭（一七三六―一八一七）月船に参じ、長松寺の月江宗純を嗣ぐ。晩年失明す。

一八〇 赤石某甲居士の為に点茶す。

人に代って

等閑に西江水を吸尽し、石鼎移し来たって更に茶を煎す。只、撾籬、巴鼻を没するが為に靈照をして他家に嫁がしめず。某甲居士、針頭に鉄を削り、石上に麻を種ゆ。売買、何んぞ争わん。五文錢、趙州の柏樹を買

い得たり。与奪自在。一文錢、南泉の庭花を排遣す。然も、利に因って利を求むと雖も、全く是れ齒を綴じ、牙に粘ず。者箇、是れ居士七十年前の自受用底。即今、別に一転語有り。行装に錢す。你、是れ会すや。更に曾郎の為に一領を裁す。荔枝山、碧江を搭せて斜めなり。

○等閑―なおざり。無造作。○没巴鼻―手掛かりの無いこと。○針頭削鉄―絶對に不可能な譬。○石上種麻―情識分別を越えた境界。○趙州―「趙州庭前柏樹子」のこと。○南泉―南泉牡丹『碧巖錄』四〇則に出づ。

一八一 寛政丁巳の冬、光明藏を評唱し、湖南の如会禪師の章に到るの

日、某善男の為に焼香す。蓋し縊死の崇りと為す。

物を將て多年、石頭を衷む。何為ぞ、暖を待つて未だ曾て休せず。夜来、抛擲す。南湖の裏、万里の清風、月一鉤。

○寛政丁巳―一七九七年。○光明藏―『大光明藏』三卷。伝灯録等から諸師の機縁を抄出し評語を加えたもの。○如会―（七四四―八二三）馬祖道一を嗣ぐ。

一八二 仏成道

三祇果満して出づるに車無し。頻りに奇なる哉と叫ぶ。甚んの鼻巴ぞ。雨雪北風、寒、骨に徹す。還って看る、春色の梅花に在るを。

又 師、三日前に山を下る。

雪後、天晴れて、松、独り青し。数峰画くが若く、銀屏を列ぬ。出山、你に先んずること正に三日。成道は他の見星に如かず。

○仏成道―十二月八日。

一八三 早雲開山、特賜、正宗大隆禪師以天和尚没後の卵塔を造ること

を許さず。偈を以て戒めて曰く、刹界三千、一塔婆。骨頭節、也た他に由る。那んぞ須いん。設利、光彩を発することを。月は青天に在り。今茲、二百五十年忌に当り、周檮、謹んで其の高偈に就いて、更に一語を打し、那伽定中に呈す。付して乞う。昭鑑せよ。

刹界三千、一塔婆。疎山聴き得て笑呵呵。然も、分文を費し去らずと雖も、雨洗風磨して、只麼に過ぐ。

○早雲—小田原、金湯山早雲寺。大徳寺派に属す。○正宗大隆禪師—以天宗清(一四七二—一五五二)東海宗朝を嗣ぐ。大徳寺に住す。八三世。○刹界—国土。この世界。○那伽定—仏の禪定。○昭鑑—仏菩薩が衆生を照らし鑑みて護りたまふこと。○疎山云々—「疎山寿塔」の話。○呵呵—笑う声。○只麼—ただするだけ。

一八四 初祖忌

落葉紛紛として祖園に下る。初めて知る。分随、却って冤となることを。言うこと莫れ、魏使、葱嶺に逢うと。少室、悠然として未だ門を出でず。

○初祖忌—達磨忌。十一月五日。○魏使云々—達磨が示寂し、葬ったが、魏使が葱嶺山で隻履を持って印度に帰るといふ達磨に出会った。そこで、達磨の墓を掘り返すと隻履のみが残っていたという故事。○少室—少室山に住した達磨のこと。

一八五 普門開山、心源禪師の四百年

龜谷の月山に孤負す。謾に言う、心源に透徹せば、未だ免れず。深草裏

に蹲ることを。敢えて蘭溪四世の孫と称す。点検し将ち来たれば、宿世の冤。焼香三拝。蘋蘩を薦む。

○心源禪師—心源希徹—(一四〇三—)臨済宗大覺寺派。月山希一を嗣ぐ。建長寺に住す。七〇世。○蘭溪—建長寺開山蘭溪道隆。○蘋蘩—粗末な供物。

一八六 灯明開山、円仲和尚の四百年

古鏡、未だ磨須せざる時若何ん。那伽定裡、笑呵呵。果然として、彼此、妍醜を分かつ。山僧の白髪が多きこと孰与れ。

○灯明—臨済宗円覺寺派に属す。○円仲和尚—円仲省鏡。○孰与れ—はと較べて優劣はどうか。

一八七 宏恵妙顯禪師の十七年

憶昔し、盧公、翠峰に住す。洞庭の煙雨、望めば從容。夜来、重ねて石屏に倚って臥す。月、浪心に落ちて蹤を見ず。

○宏恵妙顯禪師—遂翁元盧(二七一七—一七八九)白隠を嗣ぐ。○從容—ゆったりと落ち着いた様。

一八八 芝山和尚忌

虚空、昨夜、筋斗を翻す。和尚、今朝、定を出で来る。未だ鳴らず、斎、已に訖る。知らず、托鉢して誰とか回る。

○芝山和尚—不明。

一八九 大般若の開筵

空、是れ空に非ず。色、色に非ず。謾に即字を添えて、眼、塵を生ず。摩訶般若波羅蜜、彼岸の花は、此岸に映じて新たなり。

○大般若—大般若波羅蜜多經六百卷。○空云々—色即是空空即是色を言う。○

摩訶般若波羅蜜―最極の勝れた般若の大知恵のこと。○彼岸―迷いの世界を此岸に対して悟りの世界を言う。

一九〇 関山国師の四百五十年

関山会裡に生死無し。柏樹話頭に賊機有り。箍桶箴籬、何限の恨み、満牀の風雨、故に霏霏。

○関山国師―妙心寺開山、関山慧玄（一二七七一―一三六〇）大灯国師宗峰妙超を嗣ぐ。○関山云々―「慧玄が者裡に生死無し」「柏樹子の話に賊機有り」等の語のみ伝えられている。語録無し。

一九一 本覚浄妙禅師の三十三年

昔年、化を他方に遷し去る。今日、他方より化を遷し来る。今日の客は、昔年の客に非ず。灯籠、壁に縁って天台に上る。

一九二 鹿苑院殿の四百年

法中の禿子、俗中の王。雙眸を換却して道場に坐す。四百年前、離別の後。眉毛厮いて結ぶ一僧堂。

○鹿苑院殿―足利義満の法名。鹿苑院は相国寺派に属す。

一九三 駿州の海宝寺、大陽和尚の七年

七年前、這の老を活埋し、今日、分明に喚起し来る。酖酒、頻りに斟んで足ることを知らず。依然として酔後更に盃を添う。

○海宝寺―静岡県。妙心寺派に属す。○大陽和尚―不明。

一九四 最明寺殿の五百五十年

仏法のお湯、曾てせざるに似たり。恩を知って酬ゆる処、冤憎を結ぶ。扶桑六十州、盟主、也た是れ水雲行脚の僧。

○最明寺殿―北条時頼の法名。○最明寺―建長寺山内にあったが、現在は廃寺。

一九五 靈源和尚の三十三年 室を芥室と曰う。

這の老、試みに芥室の辞を聴け。当頭、額を闘わす。五須彌の春風。曾て庭際に到らず。梅樹競い開く南北の枝。

○靈源和尚―靈源慧桃（一二二二―一七五八）白隠を嗣ぐ。

一九六 熊嶽開祖、仏地禅師の四百年

拈出ず。禅師、東嶽の真、分明に是れ旧時の人にあらず。傷風、今日、序髪するに慵し。惹き得たり、満堂一笑の新たなることを。

○熊嶽開祖、仏地禅師―鎌倉初期の人。覺晏（日本達磨宗）のこと。大日能忍を嗣ぐ。号は仏地又は東山。

一九七 初祖忌

嵩嶽、今年、霜未だ飛ばず。満庭の黄菊、朝輝に映ず。胡僧、西天の路を忘却し、却って神光の背後自り帰る。

○初祖―禅宗の初祖達磨のこと。十月五日を達磨忌とする。○嵩嶽―達磨の住した少林寺の山号。○胡僧―印度の僧の呼称。○神光―二祖慧可のこと。

一九八 仏成道

清香、暗に動く雪中の梅。曾て南人の笛裏に入り来る。将に謂えり、羅浮猶を夢を作すは、剡溪、興尽きて客舟回る。

又

夜半、城を踰をんで。恨み甚んぞ休せん。六年結び得たり。雪霜の愁い。明星現ぜず、扶桑の暁。幾ばくか箇の閑人を、競って頭を挙ぐ。

○仏成道―十二月八日。○羅浮の夢―隋の趙師雄が羅浮（地名・広東省増城県

の東に位置し、山麓は梅の名所の梅花村に宿泊し、梅の精と会ったという故事。○剡溪―地名。浙江雀の曹娥江の上流にあり、晋の王子猷が雪の夜に戴逵を訪ねた所として有名。○夜半云々―釈迦が出家するにあたり、夜半城を抜け出した故事。○六年云々―釈迦の六年の苦行。○明星―釈迦が明けの明星を見て悟った故事。○扶桑―日本を指す。

一九九 仏涅槃

園林、昨日今日、鷓鴣一声兩声。是れ脱空謾語にあらず。果然として瓦釜雷鳴。

○鷓鴣―きじ科の鳥。○脱空謾語―内心に実無く、みだりに言語を弄ぶこと。

○瓦釜雷鳴―忠言が鳴りをひそめ、悪人の讒言が盛んなこと。

二〇〇 月桂中興一睡和尚の二百年

遺偈に云わく、七十四年の夢、覚め来たって一も也た無し。

一睡、覚め来たって一も也た無し、当頭拈出す、祖師の図。相見て説くことを休めよ、百年の夢。未だ夏ならざるに、満庭の躑躅朱し。

○月桂―東京都新宿区にある。円覚寺派に属す。関東十刹に数えられる。

○当頭―真っ向から、そのとき、直接の意。○躑躅―つつじのこと。

二〇一 崇徳開山仏満禪師四百五十年

入定巖中、曆日無し、閻浮四百五十霜。子孫若し是れ慚愧を知らば、祖前に向かって此の香を焼かず。

○仏満禪師―大喜法忻（？）一三六八）浄智寺の太平妙準を嗣ぐ。応安元年九月続灯庵にて示寂。○閻浮―印度の想像上の地名。○慚愧―罪過を恥じること。

二〇二 前住円覚続灯庵開祖、敕賜仏満禪師、自ら石室を開いて大寂定に入る。遺偈に略して曰く、巖上一室を開き、一坐五百生と。今茲、丁丑の秋、九月二十四日、伏して四百五十年の遠忌に値う。遠孫の守塔、鼎州座原、闔山の衆を請して大齋会を修す。東堂の実際和尚、山野をして拈香せしむ。

曾て石室を開いて久しく身を蔵す。今日出頭す、顔春に似たり。話つて巖中趺坐の処に到れば、閻闔として笑うが如く、又、嘖るが如し。響見ずや見ずや。君見ずや。今時の人か、昔時の人か。

○丁丑―一八一七（文化十四年）○鼎州―鼎州法重（？）一八四三）實際を嗣ぐ。○實際―實際法如（一七三二―一八二一）月船に法を得。円覚寺続灯庵に住す。○閻闔―和らぎ慎むさま。○響―軽い感嘆詞。

二〇三 清蔭・西庵、受業の太源禪師の為に斎を設く。

寧ろ桃源に向かつて此の花を求めんや。靈雲の背後に玄沙有り。朝来、忽ち見る、寒梅の発くことを。却って孤山の処士の家に勝れり。

○清蔭―清蔭音竺（不詳）誠拙を嗣ぐ。○西庵―不明。○太源禪師―不明。

○桃源―陶潜『桃花源記』に出づ。俗世間を離れた平和な別天地。

二〇四 本覚靈照禪師三百五十年

ず。之を披けば則ち周元通實一文を得たり。

妙明本覚野孤窟、母胎を跳出して一拳を豎つ。遠忌、茲に臨む。須く弁取すべし。周元は、是れ孔方泉ならず。

○本覚靈照禪師―仁濟宗頌（不詳）悟溪宗頌を嗣ぐ。大徳寺六二世。中御門天皇より禪師号を賜う。○弁取―会得すること。○孔方泉―孔方とは、銭のこと。

二〇五 国清開山の四百五十年

二百、筵に臨む、雲水の家。端無く定より起きて龍蛇を弁ず。春天突出す、芙蓉の雪。鞋子却って香ばし、楚地の花。

○国清—国清寺。円覚寺派に属す。『高峰頭目の法嗣、無礙妙謙（？）—一三六九』を開山とする。○弁龍蛇—聖者と凡人を見極めること。

二〇六 泥牛開山、南山和尚の五百年、預修

無角の泥牛変じて虎と作る。夜来、月に嘯いて南山に靠る。南山の深き処雲霧多し。管中に向かつて一班を窺うこと莫れ。

○泥牛—円覚寺派に属す。○南山和尚—南山士雲（一二五四—一三三五）臨済宗聖一派。円爾に就き、無学祖元について省悟す。後、博多の承天寺に住す。後、諸寺に歴住す。○預修—年忌前に法要を行うこと。

二〇七 高嶽開山、雲山和尚の四百五十年 人に代って

雲山の溪月、皆旧に仍る。秋葉、春花、遷謝頻りなり。四百五十年遠の事。一回拳著すれば一回新たなり。

○高嶽—不明。○雲山—雲山智越（一二八〇—一二五八）のことか。建長寺の無隠円範を師事し、その印可を受ける。円覚・浄妙に住す。

二〇八 月津和尚の十三年

松杉、水を隔てて蔭涼清し。翠滴誓前、日夜鳴る。将に謂えり、十三徽外の曲。果然として望裏、雲行を遏む。

○月津和尚—不明。○徽外—美しくないこと。

二〇九 本師、靈印和尚忌

我が師、老胡に先だつこと三日。革履、風霜の路遠いかな。聞き説

く、宋雲天竺に使いすと。赤鬚の碧眼、定んで疑猜せん。

○靈印和尚—宇和島、仏海寺の靈印禪師。誠拙受業の師。—○老胡—古仏のこと。本来は釈迦や達磨を指す言葉。○宋雲—敦煌の人。伝記に諸説がある。○赤鬚碧眼—外国人のこと。

二一〇 五月十二日、預め浄妙禪師の斎を設く。

斎に因って今日重ねて相思う。示寂の当年午時に在り。首を揆えて幾回か空しく墮涙す。君が為に説かず、誰か有ってか知る。

○浄妙禪師—月船禪慧のこと。誠拙の師。

乗炬

二一一 法達上座

昨日曾て受業を省し、今朝速やかに涅槃に入る。来来の路、去去の路。火裡の蓮、雪を帯びて寒し。

○乗炬—たいまつを取って茶毘にする意。

二一二 祖松藏主

道者、自ら裁ゆ一寸の松。青青として翠を添う。破頭峰、端無く、昨夜、謾に吹折す。借問す。渾家、什麼の風ぞ。是れ鏝頭親しく雨を帯びず。争でか知らん。触処、是れ蒼龍なることを。王老師、得失を論じること休めよ。祝融徂徠、恐らくは、雷同せん。且らく道え。松藏主什麼の処にか在る。火把を挙げて云わく、只、濤声の起処に就いて見よ。一時、丑丁童に分付す。

○道者云々—臨済栽松の故事のこと。○王老師—あまたの老師。諸善知識のこ

と。○丙丁童―火の神のこと。法眼の会下の報恩玄則の省悟の因縁である「玄則丙丁童子」の公案がある。

二二三 一堂禅味上座

頼るに此間一味の禅有り。布毛吹いて送行の篇に当つ。会通は鳥窠の意を会せず。五月の山房、杜鵑叫ぶ。

○一味禅―如来禅、祖师禅などの純一無雜な最上乘の禅を指して言う。

○会通―唐代の人。牛頭宗。鳥窠道林に師事しその法を嗣ぐ。道林のもとを辞して行脚に出ようとした時、道林が布毛を吹くにちなみ、禅の奥旨を悟った故事が有る。○鳥窠―鳥窠道林（七四一〜八二四）。枝で常に坐禅をしていたので、鳥窠と称せられた。徑山法欽を嗣ぐ。白居易の参禅の師として名高い。○杜鵑―ほととぎす。

二二四 玄微通徹上座

聞見覚知、一一に非ず。謾に言う、出入離微に涉ると。禅に腰無く、袴に口無し。朶朶の青山、足を挙げて帰る。

○離微―一切の繫縛を離れ、万物と一体となること。大悟の境界。○朶朶―多くの枝葉、果実の垂れ下がったさま。

二二五 襄巖古龐上座

龐老、未だ石頭に見えざる時、一口に西江の水を吸尽す。脚跟下三尺、泥深し。阿刺刺、千里万里。左右を顧視して云わく、大衆、還って龐上座の帰源の処を知るや。咄。火把を擲下して云わく、爾より出る者は爾に還す。

○石頭―石頭希遷（七〇〇〜七九〇）青原行思を嗣ぐ。薬山に法を授く。無際大師と諡号す。『参同契』一巻を著す。

二二六 滅堂惠生上座

心生すれば種種の法生じ、心滅すれば種種の法滅す。馬大師不安、日面仏月面仏。江南の梅、花を開き、江北の天、雪を飛ばす。生上座会せば則ち会せよ。其れ未だ然らずんば耳根を穿却して諦聴し去れ。座具を挙げて云わく、臘月二十二日、大衆、入里乞食。

○心生云々―『大乘起信論』の語。本具一心の動きが万法の動きであること。

○馬大師云々―『碧巖録』三則に出づ。○日面仏月面仏―日面仏は一八〇〇才の長寿を保つ仏、月面仏は一日一夜の寿命の仏。○穿却―うがつこと。○諦聴―明らかに聴くこと。

二二七 惠節禅尼逆修

老倒たる香巖、落節の時。謾に言う、更に修治を仮らず。憐れむべし。葉を摘み枝を尋ぬる客、又、道、分明に所知を忘ず。惠節。惠節。汝、能く記取せよ。他の便宜を得る底、還つて是れ便宜に落つ。何が故ぞ、一茎、両茎、人の会する無し。斜斜曲曲、風に吹からる。

○逆修―予め供養を修すること。○香巖―香巖智閑（？〜八九八）百丈のもとで出家し、偽山を嗣ぐ。○落節―妄想計らいを止め、解脱すること。○修治―修行のこと。○妄所知―香巖智閑の大悟の因縁。○記取―覚えておくこと。○便宜―たまたま都合のこと。

二二八 得一庵の無隠周犀居士の逆修

心外に物無し、心内も亦然り。内外路断え、逆順両ながら全し。無隠居士、這裡に向かつて会取せば、死即ち是れ生、生即ち是れ死。一念即ち万年、万年即ち一念。縦令い恁麼に会し去るも、尿臭氣、口角辺に在

り。別に仏祖不伝の伝を將って一時に伝え去らん。火把を擲下して云わく、趙州沙彌、南泉に見ゆ。

○心外—自己を措き、外辺に對すること。○趙州—趙州從諗（七七八～八九七）南泉普願に謁し契悟す。真際大師という。○南泉—南泉普願（七四八～八三四）馬師を嗣ぐ。

二一九 雲頂庵の塩海座原

四大海を踏翻し太虛空を斷取す。何れの処にか南北有らん。路は雲頂從り通ず。恁麼不恁麼。一喝、正宗を滅す。

○雲頂庵—円覺寺派塔頭。蘭溪の法嗣、空山円印を開山とする。○塩山座原—塩山円檢（雲頂庵二三世）○四大海—古代印度の世界觀。『智度論』に出づ。○踏翻—けとばすこと。相對的差別を打ち払う。○恁麼不恁麼—こうともいえず、こうでないともいえず。

二二〇 非仏心院一滴玄海居士

非心非仏、水よりも冷ややかなり。即仏即心、藍よりも青し。此の方書を把って、頻りに売弄す。妨げず、江又北江南。夫れ惟れば非仏心院一滴玄海居士、業、扁鵲を祖とし、道、老聃を師とす。名、常の名に非ず。天地万物を根と爲し母と爲す。法、何んぞ曹て法ならん。醍醐毒薬と二と説き三と説く。金烏、青嶂に上り、玉兔、碧潭に落つ。生や七十有四自らの仁術を行う。死や八月十日、他の玄談を聴く。這裡に到って什麼の谷神不死とか論ぜん。什麼の虚無恬澹とか説かん。会せば則ち会せよ。其れ或いは未だ然らず。我に還丹の一粒有り。鉄に点じて金と爲す。的の一句子、尿腸を抖して施撒呈し去らん。須く是れ実悟実參すべし。

火把を拈起して云わく、龍象の蹴踢は驢の堪える所に非ず。

○非心非仏—馬祖の語に基づく公案。『無門関』三三則に出づ。○即仏即心—即心即仏と同じ。仏とは自己の心にはかならない。○扁鵲—人名、名医の代表語。○老聃—老子の諡。道家の祖とされる。○金烏—太陽。○抖擻—あげる。○龍象蹴踢—学徳兼備の修行者が參集して互いに弁道練磨し合うこと。『臨濟録』に出づ。大悟の行履は無眼子に分かるはずはない。

二二一 惠林寺の悦山和尚の逆修

登楼の一望、吳越に分る。梅柳江を渡って春未だ闌ならず。国を去って十年帰ること得ず。雲鴻時に故人の翰を送る。共に惟れば、前住当山悦山和尚、己事を究明し他の瞞を受けず。座を五帝師の塔前に分かつ。謂つつ可し。人天の眼目と。華を七帶師の塔下に拈じ、仏祖の心肝を露出す。速やかに青原の鉤斧を付属し、親しく王老の牡丹を指示す。之の如く心池笛川、盆を浮かべ月に嘯き、乾嶠富嶽、寿を保ち安を等くす。天堂地獄に遊戲し、生死涅槃に冷笑す。這裡に到って、這の老和尚、齡九旬に逼り、人天の供養を受くるに忍びず。心、黄龍の自ら祭文を制し、佳羹を排列し、且つ読み且つ餐するに倣わんと欲す。爰を以て今月今日活処に死処の仏事を爲し、死処に活処の仏事を爲す。易易難難、満堂の菩薩子会すや、也た無しや。其れ或いは未だ然らず。我に一句子有り。你に与えて看取せしめん。鉤子を挙げて云わく、世間、將に謂えり。知音少なりと。南嶽峰頭、懶残有り。喝一喝す。

○惠林寺—臨濟宗妙心寺派に属す。山梨県。夢窓疎石を開山とする。○登樓—織田信長の兵火を被り、快川国師は、樓上で火定に入った。○五帝師—不明。

○七帝師―夢窓疎石を指すのか？ ○青原鉏斧―青原行思と石頭希遷と南嶽懷讓三者の因縁。○王老牡丹―南泉普願と法嗣の陸亘大夫との商量。『碧巖錄』四〇則に出づ。○天堂―天上界のこと。○黃龍―黃龍慧南（一〇〇二―一〇六九）臨濟宗黃龍派の祖。○南嶽峰頭―南嶽衡山の頂上。

二二二 海蔵寺の鎮州和尚の逆修

我に一句子有り。豆州即鎮州、曹溪の水を吞却し、吐いて潯沱の流れと爲す。觀音殿を推倒し、化して弥勒の樓と作す。蒼龍の骨を擊碎し白虎頭を活埋す。恁麼も也た得ず。不恁麼も也た得ず。恁麼不恁麼、総に得ず。火把を拈起して云わく、十二時中、好消息、威音那畔、宗猷を挙す。

○海蔵寺―円覺寺派に属す。○鎮州―河北省西部の正定県の一帯。臨濟義玄の宗風拳揚の地。又、趙州は趙県で活躍した。○潯沱―川の名。山西省に源を發し、河北省で黄河に注ぐ。○蒼龍―方位の四神の一。東方禪の幽玄な宗旨に譬える。

二二三 前住長松、物先禪師

將ち去り、將ち来る。担取、放下、趙州、嚴陽の二老人。早く、汝未生前の罵を被る。咄。這の什麼をか罵る。隻履、敢えて西天に向かわず。天地、空しく余す、一草舎。

○長松物先―物先海旭（一七三六―一八一七）月船禪慧に參じ、長松寺の月江宗鈍の法嗣となり、後に東輝庵に住す。晩年失明す。○將去云々―「趙州放下著」の故事。趙州と法嗣の嚴陽善信との問答。○隻履―達磨が示寂後、隻履を携えて印度に歸った故事。

二二四 無染禪尼の逆修

蓮華の水に在るが如し。世間の塵に染まず。世尊、太だ饒舌。自らの色身を憎むに似たり。夫れ惟れば実道無染大師、紅粧二十有三、髪を薙つて志を決す。白髪五十有二、臂を掉つて真に歸す。幸いに三従を免れ得て、敢えて五辛を食らわず。善きかな、解脱を袈裟と爲し、咄かな、無心を家珍と作す。未在未在。我に一句子有り。你に与う。醍醐、毒藥、口唇に瀉下し去らん。火把を拈じて云わく、却つて恠む。宝陀嚴上の客、相逢うて、応に笑うべし。未歸の人。

○色身―四大・五塵などの色法から成る肉身のこと。○三従―女性は幼にしては父母に随ひ、嫁しては夫に随ひ、老いては子に随ふこと。○五辛―五つの辛味のある蔬菜。○未在未在―まだだめだ。

誠拙禪師語録 卷中 終